

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	郭 昱 昕
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>プロソディ・シャドーイングが日本語の長音・促音の知覚・産出改善に及ぼす効果 —中国語を母語とする日本語学習者を対象として—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 中 條 和 光</p> <p>審査委員 教 授 畑 佐 由 紀 子</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）が日本語の音声を習得する際の、プロソディ・シャドーイング（prosodic shadowing）の効果を検討したものである。具体的には、中国人学習者が苦手とする日本語の長音と促音を取り上げ、知覚と産出の改善におけるプロソディ・シャドーイングの単独・反復課題の有効性を検討し、プロソディ・シャドーイングの遂行に影響を及ぼす学習者の個人差要因を解明した。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第1章では、日本語の特殊音素（特殊拍）について、その特徴を述べ、学習者の知覚と産出の特徴を分析した。そして、先行研究で有用性が示唆されているプロソディ・シャドーイングの練習によって、第二言語の音声の誤用が改善される可能性に言及し、本研究の問題と目的を述べた。この領域では、教育現場を想定した実践的研究が多く、プロソディ・シャドーイング課題の前後に他の課題を加え、一つのセットとして課題を遂行させるのが一般的であった。しかし、それではプロソディ・シャドーイング自体の効果を検証することはできない。本研究は、先行研究で採用されている課題遂行法を吟味した上で、プロソディ・シャドーイングのみを用い、長期間のプロソディ・シャドーイング単独課題、及び短期間のプロソディ・シャドーイング反復課題の有効性を実験的に検討するものである。</p> <p>第2章では、実験的検討の内容を記述した。第1節（実験1）では、従来のプロソディ・シャドーイングの複合課題に対して、プロソディ・シャドーイングのみを導入する単独課題を採用し、中国人学習者の長音・促音の聴覚的知覚と口頭産出における誤用が改善されるか否かを検討した。その結果、産出面では効果がみられたが、知覚面では効果がみられないことがわかった。第2節（実験2）では、従来の中期から長期にわたるプロソディ・シャドーイング課題に対して、短期間のプロソディ・シャドーイング反復課題を導入し、中国人学習者の長音・促音の口頭産出における誤用が改善されるか否かを検討した。その結果、語彙単位の口頭産出に関しては、練習の前でも後でも、音韻的短期記憶容量の大きい学習者の成績が、小さい学習者よりも有意に高かったが、全体としては、プロソディ・シャドーイング単独課題を中期から長期にわたって実施した場合と比較して、音韻的短期記憶容量の大小にかかわらず、同程度の改善効果がみられることがわかった。他方、単文</p>			

単位の口頭産出に関しては、音韻的短期記憶容量の大きい学習者は小さい学習者よりも成績が有意に高かったが、語彙単位の口頭産出と同じような改善の効果はみられなかった。第3節（実験3）では、プロソディ・シャドーイング課題による長音・促音の口頭産出の改善と、課題文の口頭再生の向上に影響を及ぼす学習者の個人差要因について検討した。具体的には、作動記憶容量と音韻的短期記憶容量、音韻符号化速度を取り上げ、これらの要因が、プロソディ・シャドーイング課題の遂行成績に及ぼす影響を調べた。その結果、単語単位の口頭産出では、作動記憶容量、音韻的短期記憶容量、音韻符号化速度が影響を及ぼし、シャドーイング課題文の口頭再生の向上には、音韻符号化速度が影響を及ぼすことがわかった。他方、単文に含まれたターゲット語彙の口頭産出に関しては、音韻的短期記憶容量や音韻符号化速度といった音韻処理にかかわる要因が、特定の条件下で影響を及ぼすことが確認された。

第3章では、3つの実験について総合考察を行い、本研究の意義と発展課題を述べた。プロソディ・シャドーイングは、課題を遂行する期間の長短、形式、課題材料文にかかわらず、中国人学習者の長音・促音の知覚・産出を改善できる可能性が高い。ただし、ターゲット語彙について、いかなる場面でも誤用が出ない水準まで改善するためには、長期にわたるプロソディ・シャドーイングの遂行が必要であり、学習者自身が音声を改善する目的でプロソディ・シャドーイングを行う場合は、幾度かの反復課題を遂行するだけでなく、月単位で毎日、課題を遂行する必要があると言える。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. これまでの実践的研究の課題セットからプロソディ・シャドーイングのみを取り出し、中国人学習者の日本語の特殊音素（特殊拍）の習得におけるその有効性を長期と短期の両期間から検討した。
2. 音韻情報の聴覚的知覚と口頭産出の両側面から、課題材料を単語単位と単文単位に分け、プロソディ・シャドーイングによる改善効果を実験的に検証し、日本語学習における練習課題としてのプロソディ・シャドーイングの有用性を明らかにした。
3. プロソディ・シャドーイングの有効性を支える学習者の個人差要因を設定した実験を行い、課題遂行に及ぼす影響を明らかにするとともに、プロソディ・シャドーイングを日本語の音声指導・学習に導入する際の理論的根拠の一部を提供した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月16日